虹

中里の家だより
第 10 号

発行年月日
昭和63年9月1日

発　行
社会福祉法人
安房広域福祉会

〒294－02
館山市中里288－1
0470（28）2022

第二回納涼会開かれる

岡田義之

去る八月六日、好天にも恵まれ「第二回中里の家納涼会」が開催されました。今年も夜店では焼そば・焼いか・フランクフルト・かき氷・綿菓子が見られ、催し物では盆踊り・船形仲宿青年会による屋台・くじ引き大会・カラオケ大会が催され、盛会のうちに終える事ができました。

今年の納涼会の目的は、「地域との交流を図る」でした。地区の区長をはじめ地域の子供達、船形学園からのボランティアの方と多数参加していただき、園生との交流も十分に図る事ができたと共に、中里の家に対しての理解もいただけたのではないかと思います。

盆踊りで納涼会は幕開きとなり、園生・父兄・職員がジェンカの軽やかなステップで大きな輪を作りました。日頃から練習した成果もあって園生も上手にリズムに合わせて踊ることができ、楽しい笑顔が見られました。曲は白浜音頭・ドラエモン音頭・炭坑節と続き、曲に合わせてやぐらの上で太鼓の音を響かせてくれる園生に、踊ってくれる園生も見られました。

カラオケ大会では、多数の参加者で数多くの曲を聴かせてもらう事ができました。音感の良い歌声で魅了してくれた園生や、日頃から歌い込んでいるのかマイクを慣れた手つきで持ち、自慢のノドを披露して下さった父兄もいらっしゃいました。出場してくれた「歌手」のうまさに、客席の皆様も驚いたことでしょう。

くじ引き大会では沢山の景品が用意され、予め配られた番号札を手に、園生も地域の子供達もわくわくした様子で、抽選結果に耳を傾けていました。

この様に納涼会そのものの楽しみはもちろんですが、今年は納涼会の準備段階から、積極的に園生にも参加してもらいました。園生はそれぞれチケット係・くじ引き係・ポスター係・カラオケ係に分かれ、ポスターの絵を描いたり、紙を切ってチケットやくじを作ったり、会場設営では提灯つりやテント張りと、一生懸命頑張りました。園生一人一人の力が結集されて大きな力となり、納涼会という行事を開催する事ができたという喜びもあったのではないかと思います。

障害を持つ人が望んでいる事は「私にも仕事を下さい」であるという話を聞いた事があります。誰でも自分に仕事が与えられる事は嬉しいことであり、仕事がないのは寂しいことです。ですから、園生の為に行事を用意するだけではなく、園生と共に行事を造ってゆく事も大切ではないかと思います。これからも運動会等沢山の行事が予定されています。園生と共に職員一同、力を合わせて素晴らしい行事にしてゆきたいと考えております。

感じていること

施設長　山口　一

いつの間にか秋の気配を感じるこの頃ですが、わが「中里ファミリー」は元気一杯、毎日の生活を楽しんでおります。

今年もいろいろの行事を過ごしてきましたが、全ての行事がお天気にも恵まれ楽しく実施できたことは、わが「中里ファミリー」が良運を持っている証拠でありまして大変喜んでいる次第であります。これから秋に向けて、八幡の祭礼の見物、鴨川シーワールドの見物、そして運動会など行事が続きます。それらに向って「中里ファミリー」の張り合いのある毎日が続くものと期待しております。皆様のご協力をいただきながら、楽しく過ごしてまいりたいと思います。

ところで、「中里の家」も開設以来一年有余を経過しました。特色のある施設運営ということで、私どもなりの考えで努力し、運営を進めてまいりましたが、反省はあるにしても、ほぼ所期の目標に近づきつゝあると自己満足をしております。しかしながら、果してこれで良かったのだろうかという危惧の念も抱いているこの頃であります。これからは、広く皆様のご意見も参考にして、より充実した施設運営に心掛けていかなければならないと考えております。

先般、地区別の保護者会を開催して頂き、率直な意見交換のできたことは大変有意義であったと喜んでおります。その際、子を思う親の心の尊さを身に染みて感じた次第でありますが、私達もご期待に応えられるように福祉の心を再認識し、より良い施設運営に努めなければならないと痛感いたしました。

これからも「中里ファミリー」の生活は続きます。入所生と家庭、そして施設との三位一体となった処遇が展開できるように施設も頑張りますので、今後も一層のご協力をお願い致します。

どうぞよろしく！

小栗周子（おぐりかねこ）

はじめまして。八月一日より、中里の家の指導員助手として働いています小栗周子です。私は昭和三十八年十月十八日生まれで、現在二十四才の独身です。

これまで白浜保育園のパート保母として、三年間勤めていました。これは小さい頃からの夢でしたが、三年間勤務して、子供を知ることができてよかったと思っています。

私は短大時代に障害児問題研究部に入部し、精薄児と一緒に遊ぶことが多くなり、少しずつこの子達の為になってあげたいと思うようになりました。私の先輩もなぜか精薄者の施設に勤務した人が多かった為か、私も出来れば精薄者の施設に勤めたいと思っていたので、中里の家に勤められて本当にうれしく思っています。

まだ一ヶ月で何もわからない私ですが、一生懸命がんばりたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

医務室より

古川　操

砂浜には、まるで花が咲いたかのように所狭しと並んだパラソル。まだまだ、身にこたえるような暑さが続いています。園生も、待ちに待った帰省。きっと家族の方に囲まれ、楽しく過ごされた事でしょう。

夏場はどうしても、暑さから睡眠不足や不規則な生活、清涼飲料水をついつい摂りすぎたり、かんじんの食事が十分とれなくなってしまう（甘味は食欲を減退させる）事などがあり、「食欲がない、元気がない、疲れが抜けない」といった、いわゆる夏バテの状態になりやすくなりますので、食生活の充実を図り、他の生活上の注意点とも併せ、ふだんコツコツと鍛えた身体で暑さをふっ飛ばし、夏をのりきってゆきましょう。

保護者の便り

我が子一志のこと

豊見山文雄

生まれてからおよそ一歳半になるまで、妻も私も、我が子の異常に全く気がつかなかった。

二歳に近くなって、まわりの人から様子がおかしいと言われて慌てて病院に行った。脳波に異状があることがわかった。

三年間くらい病院に通っただろうか。現在の医学では、こうした病気の原因など何一つ解明されていないという。眼の前がまっ暗になったような衝撃に、急に身体から力が抜けていった。

三歳の頃、近くの障害児施設に入園することになった。

園長は、「過去（障害の原因）のことをあれこれ詮索するより、この子と共に、これからの人生をどう生きて行くかという事の方がより大切ではないか。」と言った。その言葉が、いつまでも私の頭から離れない。たとえ障害児であろうと、人間としての尊厳に変わりはない。でも〝この子と一生係わって生きて行かなければならない。緊張の連続じゃぁかなわんなぁ〟と思う。

〝親にも自分の人生がある、もっと気楽に行こう〟そう心に決めた。とは言っても、彼が家にいる時は彼の全ての行動が、私の神経をいら立たせる。家の中にあるもの、財布・時計・定期券・本、目につく物は何でも窓の外にほうり投げる。家中を引っかきまわす。瞬時も目が離せない。つい手が出てしまう。妻とケンカになる。そんな毎日のくり返しに、妻も私もすっかり疲れきっていた。

中里の家へ入所が決まった時は正直いってホッとした。近頃は、妻も料理教室へ通ったり自分の時間を楽しむ余裕が出てきたようだ。

「中里の家」二度目の夏

井上一範

朝晩はいくぶん過ごしやすくなったとは言え、日中の暑気のきびしさ、皆様にはどのようにお過ごしでしょうか。「中里の家」では園生をはじめ、職員も暑さに負けず元気に過ごしています。

今年の夏は猛暑というよりも梅雨明けが遅く、うっとうしい日が多かった夏のような気がします。そんな中で、七月の下旬から始まったプール指導は日課の中に組み入れられ、園生・職員の楽しみの一つとして行なってきました。昨年は水の中に入るのさえ恐がっていた園生も、今年は恐る恐るでも水の中に入れるようになりました。又、昨年はあまり泳げなかった園生も、昨年以上に泳げるようになり、どの園生を見ても何らかの進歩があるように見えます。

七月二十三日に行なわれました海水浴は、少し肌寒い日ではありましたが、保護者の方にも参加していただき、すいか割りやスーパーボールを砂に埋めた宝探しなど、楽しんでいただけた事と思います。又、八月八日の今年度二回目の海水浴では好天に恵まれ、夏の日ざしいっぱいの中、園生と職員、共にまっ黒になるまで泳ぎました。

日にちが前後してしまいますが、八日一日には初めての経験として、ボランティア活動も行いました。園より掃除道具を片手に、中里地区の空き缶拾いや草取り、八坂神社の掃除など全員で汗を流し、地区の人からは「ゴクローサマ」という温かい言葉も掛けていただきました。

このように、行事や色々な事を通し、また日課の中の作業、余暇時間を利用したプール指導やレクリエーション、今年度から新たに取り入れたクラブ活動など楽しむ事はもとより、体力の向上と精神面の向上を目標として、健康に充分注意し頑張っていきたいと思います。

よろしく！農耕部です

香田道丸

中里の家では、今年度から新しい作業班として農耕部が発足し、活動しています。指導にあたる職員は、最近少々太り気味の香田、幸せいっぱいの渡辺、畑のエキスパート能重の若手？三人組です。班長は鈴木正則君、副班長は里見あき子さん・川崎康夫君です。茅野正一君・豊見山一志君は職員のアシスタント。一輪車を押したり、道具や収穫物を運んだりしていますが、ちょっと目を離すとすぐに土の上にゴロリ、泥だらけになって遊んでしまいます。畑づくりは正則君と川崎君、二台の耕耘機で〝あっ〟という間に畑を耕してしまいます。特に川崎君は鍬の使い方も上手で、さつまいもの畝あげなどは職員も顔負けです。山口智章君と佐久間晃君はいつも一緒に草取りです。とても気が合う二人は、一本草を抜いては互いに見せあって嬉しそうにニコニコしています。小谷利枝子さん・中野芳照君も草取りは得意なのですが、中腰の姿勢はちょっと苦しいようで、いつもペタンとお尻をついて、手のとどく範囲の草をむしっています。草取りはみんな上手ですが、その中でも青木輝夫君・里見あき子さん・鈴木重行君は別格です。草取りマシーンの異名を持つ三人が通り過ぎた後には雑草は一本も残っておらず、不毛の大地と化してしまいます。でも気合の入れ過ぎでたまには農作物まで抜いてしまうこともあります。永井貴之君は色々な事に興味津々、特に機械が大好きで、草取りをしていても耕耘機が出てきたりするとじっとしていられません。「バッテリーあがっちゃったー？」とか「ぶっこわれてないー？」とか言いながら、心配そうに耕耘機を見つめています。

以上が、我が中里の家農耕部の仲間達です。今年は日照不足の上、雨ばかり降っていたので野菜の発育が心配されましたが、なす・とうもろこし・すいかはまずまずのできで、時には給食時の食卓に載ることもあります。職員も園生も素人ばかりの農耕班ですが、これからもみんなで、美味しい野菜が作れるように頑張っていきたいと思います。

よろしくお願いします。

編集後記

長雨・低温続きで終わるであろうと思われた今年の夏も、八月半ばを過ぎた頃から急激に残暑が厳しくなり始めました。

それでも誰一人として体調を崩す事なく、平穏な生活を送ることができるのは、それぞれが心身共に一段とたくましくなった為でしょうか。

今回は作業紹介として、夏の間自作の野菜で食卓を大いに楽しませてくれた農耕部の作業風景を覗いてみました。強い日射しの下で額に汗して作りあげた作物を収穫する喜びを、各々が味わっていたようです。

尚、他の作業班の活躍ぶりについても追ってお知らせいたしますので、どうぞご期待下さい。

まだまだ暑い日が続きそうですので健康には十分留意し、十月の運動会に向けて体力増進に努めてゆきたいものです。